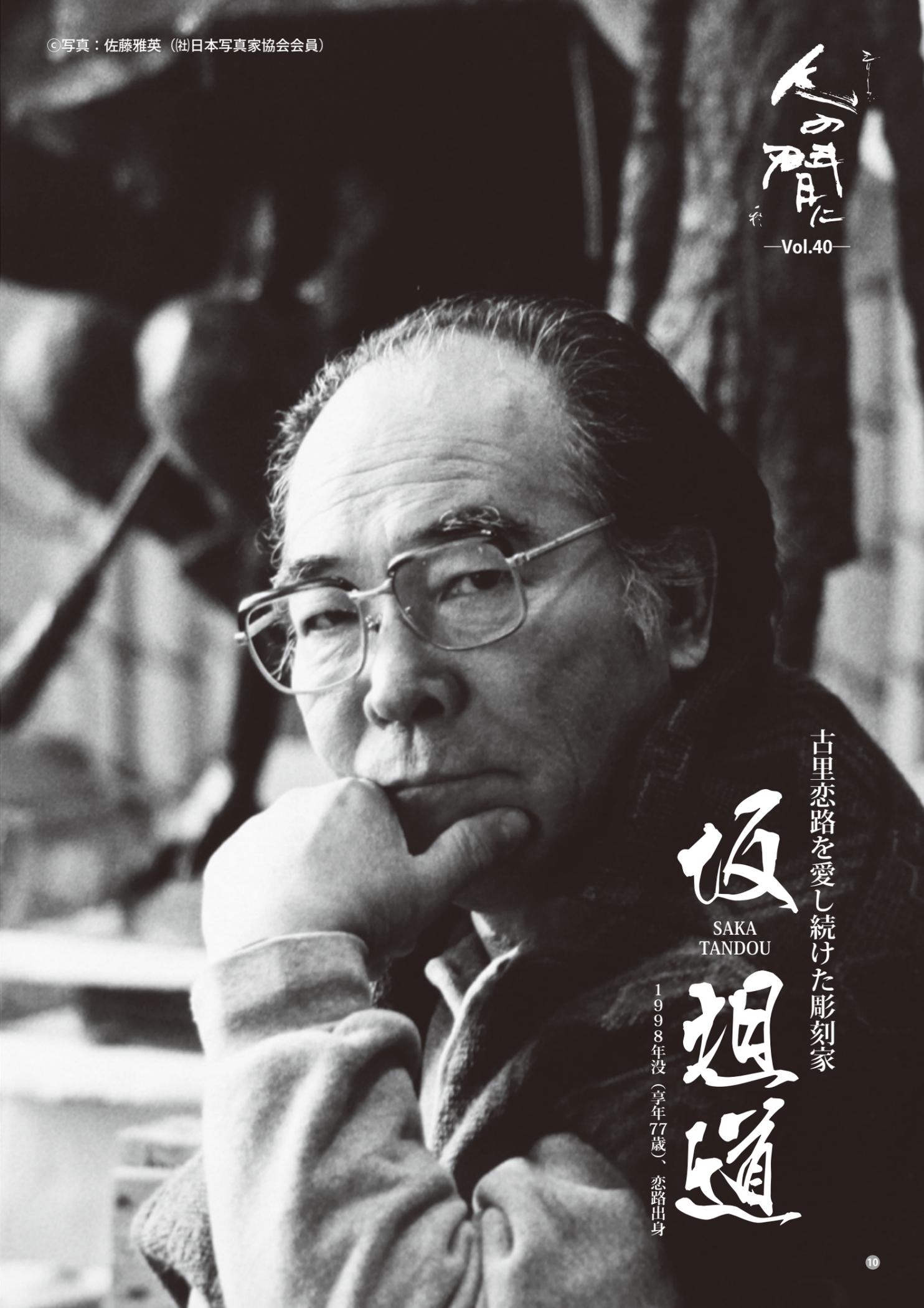


古里恋路を愛し続けた彫刻家

坂坦道

SAKA TANDOU

1998年没（享年77歳）、恋路出身



恋路が生んだ偉大なる彫刻家

700年以上前の悲恋伝説が残る恋路海岸。その一角に、若い男女の像が寄り添い、語り合うようにして悠久の時を刻んでいる。

『恋路物語』と銘打たれたその像は、恋路出身の彫刻家、故坂坦道氏（98年没・享年77歳）が64年に制作したものだ。同年、坦道氏は第7回日展で特選を受賞している。

坦道氏は20年11月6日、恋路に生まれ、松波小学校3年のときに母親と北海道札幌市に移住した。本名は坂青嵐。祖父は日本画家の坂靄舟、父親は油絵画家の坂寛二という芸術一家であり、坦道氏も3代目として画家の道に進もうとしていた。

しかし、生まれながらに色弱でピンクと水色の区別がつかなかった坦道氏は、絵画では進学できず、彫刻の道に進む。

彫刻家としての坦道氏は、日展入選9回、64年に特選、66年には日展会員になるなど成功を収め、北海道を代表する彫刻家となる。

76年には『丘の上のクラーク』像を制作。坦道氏の作品として最も有名な銅像となった。

作品寄贈を受けて常設展示場を開設

「クラークがあまりにも有名になってしまつて、生前はよく『クラークだけが俺の作品じゃない』と話していました」と語るのは、坦道氏の長女、加藤和何子さん。加藤さんは9月2日、息子の叙和さんと坦道氏の

いとこにあたる田中静子さん、金沢市在住の3人で、内浦庁舎4階の坂坦道作品常設展示場を訪れた。

町は、管理していた加藤さんから坦道作品の寄贈を受けた。

「父の作品は、陶芸家として同じような道を歩む自分が背負うつもりでしたが、地元の美術館のアドバイザーもあり、能登町に相談しました。しばらくたつて、能登町から作品を全部寄贈してほしいという連絡を受けたときは、電話口で震えました」と寄贈の経緯を振り返る。

「父が亡くなって12年。作品が一カ所に集まり展示されることは本人にとって最高のこと。本当に感謝しています」加藤さんら3人は、展示場で作品一つ一つを眺めながら、坦道氏に思いをはせていた。

「父の夢は恋路に巨大な観音像をつくることでした。父にとって恋路は原点であり、恋路で過ごした時間が宝物でした。これからのわたしの目標は、たびたび能登に来て、父の彫刻に会うことです」と加藤さんは話す。

古里恋路を愛し続けた彫刻家坂坦道。その作品は、能登町の財産として受け継がれていく。

恋路に帰りたいー古里への強い思い

坦道氏が亡くなる数年前、田中さんあてに坦道氏から一枚の手紙が届いたという。

「手紙には『恋路に帰りたい。恋路に帰りたい』と何度も書いてありました。坦道さんはずっと、古里である恋路への強い思いを持っていたのだと思います（田中さん）」



9月2日に展示場を訪れた坂坦道氏の遺族。左から長女の加藤和何子さん、孫の加藤叙和さん、いとこの田中静子さん

坂坦道氏略歴

- 1920 珠洲郡内浦町恋路に生まれる
本名：坂青嵐（せいらん）
父：寛二（油絵画家）
母：よしゑ
祖父：靄舟（日本画家）
- 1926 松波小学校入学
- 1930 北海道札幌市に移住
- 1939 東京美術学校入学
- 1943 新文展（のちの日展）に初入選、学徒出陣のため陸軍歩兵として入隊、陸軍予備士官学校入校、南方軍に派遣
- 1944 東京美術学校卒業（彫刻科）
- 1945 タイ・バンコクで終戦を迎える（陸軍少尉）。捕虜収容所に10カ月
- 1946 帰国。恋路で1カ月静養
- 1948 札幌市立北辰中学校美術教諭
- 1949 結婚
- 1950 (株)三越 札幌支店勤務
- 1962 札幌市立中島中学校美術教諭
北大建築科、道教大札幌、道教大岩見沢非常勤講師
- 1964 第7回日展特選『青年像』
北海道女子短期大学助教授
『恋路物語』制作
- 1965 北海道女子短期大学教授
- 1966 日展会員
- 1969 帯広駅前『大地』制作
- 1976 羊ヶ丘展望台『クラーク』像制作
- 1981 札幌大通公園石川啄木像制作
- 1982 札幌市民芸術賞受賞
日彫展西望賞受賞『酔っ払い』
- 1990 文部大臣教育功労賞受賞
- 1995 北海道女子短期大学名誉教授
- 1998 没 享年77歳
- 2008 能登町に作品寄贈
- 2009 能登町内浦庁舎4階に常設展示場が開設





前向きに生きることが
人生を輝かせる。

県警察学校第69期生に講演した日展作家

山本弘志さん

【やまもと・ひろし】
昭和14年宇出津に生まれる。中学校卒業後、9年間会社員として勤め、昭和40年からベーカリー業を継ぐ。平成20年10月31日、後継者不在で閉鎖。食品衛生指導員を44年務める。現代美術展委嘱最高賞受賞。光風会会員。石川県美術文化協会会員。石川県現代美術展審査員ほか。

警察学校で人生を語る

8月10日、石川県警察学校の壇上に山本弘志さん（70）が立ち、第69期生100人の前で講演を行った。以前に能登警察署次長として赴任していた現警察学校長から『ぜひ山本さんの人生観を語ってほしい』と依頼された講演だった。

『人生、生き生き七十年（努力は実る）』と題した講演は約80分。山本さんは、長年ベーカリー業を営んできた苦勞や経験、常に前向きに生きてきたその人生観を力強く語った。
「どん底に落ちてもあきらめない気持ちがあれば、遅れはとつても負けることはありません。前向きに生きることが人生を生き生きと輝かせるのです。自分の経験を話すことで、これから社会に出る人を応援できればという思いで話しました」

ベーカリー業を閉鎖

昨年10月31日、宇出津の小さなパン工場が閉鎖した。山本さんが営んできたそのパン工場は父親の代から65年、地域に愛され続けてきた老舗だった。閉鎖

画家としての活躍

山本さんは画家でもある。水墨画、水彩画、油絵で多くの受賞歴があり、油絵は日展でも入選している日展作家だ。これまで町内16の公共施設に20点の作品を寄贈するなど、町の文化振興にも貢献してきた。

現在は、内助として山本さんを支え続けてきた奥さんと二人でスケッチ旅行に出かけたり、来年開催する個展に向けた作品制作のためアトリエにこもる。

「人間は死ぬまで勉強。これからは健康に注意して、何事にも挑戦していきたいですね」と笑顔で話す70歳の目は、少年のように生き生きと輝いていた。



Aクラス走高跳

山本 恵未

YAMAMOTO MEGUMI

ジュニアオリンピック2年連続出場。
県内トップクラスのハイジャンパー

石川県代表として第40回ジュニアオリンピック陸上競技大会（横浜市日産スタジアム・10月23～25日開催）に2年連続の出場を決めた山本恵未さん（柳田中3年）は、県内屈指のハイジャンパー。7月に行われた全日本通信陸上競技大会石川県大会でも自己ベストタイの1.54を跳んで優勝した。
「去年は緊張して力を出し切れず、悔しい思いをしました。去年より高く跳んで自己新を出したいです」と今大会の目標を掲げる山本さん。強い決意を胸に、2度目の日産スタジアムで宙を舞う。

向口和馬君（柳田中1年）は「足が速くなりたい」と陸上部に入門した。だが、彼の才能は砲丸投げで開花。8月に行われたジュニアオリンピック石川県代表選考記録会で、12.23の自己新で1位となり県代表となった。その投てきの強さは、小学校時代に打ち込んだドッジボールにあった。
「みんな同じ1年生。調子は上がってきているし、上位入賞を目指します」と目標を掲げる。
陸上歴6カ月でつかんだ横浜の大舞台。一人のアスリートとして、重さ2.72kgの砲丸を握る。

県代表選考記録会で1位。
ジュニアオリンピックの
切符をつかんだ
元ドッジボーラー

Cクラス砲丸投

向口和馬

MUKAIGUCHI KAZUMA

